

第8回日本うつ病学会総会 招待講演

リスク化する家族—戦後家族 モデルの変遷と新たな家族像

中央大学文学部人文社会学科

山田 昌弘



今日は、難しい話というよりも、気軽に聞ける話ということでリラックスして聞いていただければと思います。

Depressionは、社会学や経済学の分野では不況と訳します。ですから、Growing in depressionは、不況期に育つことなのです。臨床系とマクロ社会科学系での定義というのは、違うと言えば違うのですが、関係ないわけではないと思っています。つまり、経済の不況を経済のうつ病と訳してもいい気がしますし、個人のうつ病は、うつ病にかかった人は不況期にあるんだ、と言うことも可能かと思っています。

私が、1998年が日本社会の変化の節目だと述べたのは、1997年にアジア金融危機が起き、1998年にいわゆるリストラの嵐が起きて、非正規社員がどんどん増えるわけです。それと同時に、中高年の男性の自殺が、この1年で1万人近く増えました。まさに経済的なDepressionと、精神的なDepressionには、かなり連関があるのではないかと思います。

いわゆるうつというものが増えて、境界がなくなってきているというお話を、基調講演の先生もおっしゃっていましたが、その結果というものが、一般的日常生活において、普通の人と関係ないわけではありません。

どういう事かという、大学の先生同士でいろいろ話していると、うつ病に関係するいろいろな出来事が起きています。これは困ったと相談されたのは、ある卒業の制作発表会があるときに、一人の重要な役をする人が当日来なくて、卒業制作の発表会がキャンセルになってめちゃくちゃになり、すごく迷惑をかけた。翌日、その迷惑をかけた人がこのこやってきて、診断書を見せて、私うつ病なのでここにこしている。どうしたらいいものかと悩むわけです。これけしからんとか言って怒ったら、何かあったら責任を取らなければいけない。かといって、そ

のままにしておいたのでは示しが付かない。何故来なかったのかと怒ろうと思った矢先に診断書を見せられてしまったので、すごく複雑で、その人の顔を見るたびに怒りが込み上げる、という事態が起きているわけです。

また、ある大学の先生と話をしたら、うちもそういうことがあったと言います。卒業論文を提出するときに、診断書を持ってきて、うつだから書けませんときた。しかし、その人はちゃんとアルバイトもやっているし、サークル活動もやっているし、就職も決まっています。卒論を書くときだけうつ状態になるらしい。卒論を書くこうとすると、気がめいてきて何もやる気がなくなるので、医者に行って診断書を書いてもらい、「これで卒業させてくれないですか、先生」と来たわけです。

これも、怒って留年させたいのですが、診断書が出ている以上、何かあったらというので大問題になったらしいのですが、ずっと残って同じこと繰り返されても困るからと、レポートを出させて卒業させてしまったらしいのです。ですからうつという人が、誰かに迷惑をかけた時、どう扱っていいのかというのが、今いろいろところで問題になっています。

ここからが社会学なのですが、この話をすると、必ず反応が2つに分かれます。一方は、リスクを冒してでも叱るべきだ、けしからん、二度とやったら駄目だとか、いくら診断書があっても卒論を提出していないのだから、卒業はまかりならんと、厳しくすべきだという反応です。もう一方は、表面的にはここにこへらへらしていても、実は心の中では病んでいるかもしれないのだから、周りの人は迷惑を受けても、受け入れてあげなければいけない、優しい目で見守ってあげなければいけない、という反応です。この話をしたときの普通の人の反応が、2つに分かれるというのは面白かったです。

このような問題も起こっていますので、ど

う対処すべきかを、教えていただけたら本当にうれしいと思っています。本当のうつ病か、言い訳として使っているかを一瞬のうちに見分けられる装置ができればいいのですが、なかなかできそうもないので、今後いろいろなところでこの問題が起きてくるという気がしています。

前置きが長くなりましたが、今日は、家族の変化ということを中心にお話したいと思っています。

先日新聞に書きましたが、結婚して離婚をしないで一生を送る確率が、もう今の20代では5割を切っています。抄録集には、結婚して子どもを持って離婚をしない今の20代の人には40%と書きましたが、学生には次のように脅すわけです。

ここに100人学生がいるうち、25人は一生結婚しない。残りの75人のうち、10年以内に離婚する確率が36%ぐらい。再婚する人もいますが、初婚で10年以内に離婚する確率というのは結婚の3分の1ぐらいと見積もられています。つまり、75人のうち25人は、結婚しても一回は離婚する。

今の70歳ぐらいの人は、結婚して離婚しない確率が90%ぐらいありました。結婚経験がある人は、男女によって違いますが97、98%。離婚経験率は10%ぐらいでした。つまり、50年前に20歳だった人は、誰でも結婚できて離婚しない人生を送れるものだと、そう思ってたわけです。

しかし、今の20歳の人にはそうではない。4分の1は一生独身で、4分の1は一回は離婚する。さらに、結婚して離婚をせずに子どもを持つ人生というのは40%、5人に2人になっています。

この事を、社会保障担当相の与謝野大臣に話したときは、非常にびっくりされていましたが、それがどう政策に反映されるかは分かりません。別の元大臣の方に話をしたときには、「うちの娘はもう離婚して家に戻っ

ている。だから、息子のほうは大丈夫かね、山田くん」と言われてしまったのですが、それは数学的な確率論からいうともう起きてしまったことなので、息子さんもその確率はありますよ、とは言えませんでした。

ですから、一般の中高年の方相手の講演では、あなたにお子さんが2人いたら、うち1人は一生未婚で家にいるか、離婚して戻ってくるかどうかですよと言って、脅しているのですが、そんな時代になったのです。

経済とか社会保障に関して、結婚して離婚しないで子どもを持って一生過ごすというのを前提にした、経済的社会的仕組みをつくってはいけない、と私は主張しています。後述しますが、精神上も一緒だと思います。つまり、黙っていれば結婚できる、結婚すれば離婚しないで一生送れる、それで安心するという精神生活を送れる人は、半分ぐらいです。かつ子どもを育てるというのは、今の20代の中では少数派になってしまったところから、考えなければいけないということです。

ですから、プログラムにも、家族の支援をどうするかというようなものがあつたと思いますが、家族がいればいいですが、そもそも家族がいらない人が増えてくるというのが現状ですから、家族がいらない人はどうやって支援されればいいのか、という話になってきます。

さらに、これは経済的な問題ですが、最近離婚が増えています、経済的破綻による離婚というのが増えているのです。つまり夫がリストラされたり、収入がすごく少なくなつてしまったので、見切りを付けて子ども連れて実家に帰ったというようなケースが頻出しているのです。私が調査した中では、若い人のうちでは離婚の2割、5組に1組ぐらいが、夫の収入低下もしくは喪失による離婚でした。

逆に言えば、配偶者が情緒的に不安定になったとか、うつ病になったときに、家族が支援してくれるかどうか分からないということです。今から20年前であれば、家族というのは、結婚したら一生連れ添うもので、親子だったら一生尽くしてその人の面倒を見るはずだ、という前提を置いてよかったかもしれない。しかし今は、「収入がなくなったから、バイバイ」というのと同じように、「病気になるっちゃった、バイバイ」と言われる可能性もあるのです。もちろん、そうではない家族もあります。夫が失業して「では、私が頑張るわ」という妻もいますが、逆に、「では、離婚する、バイバイ」というケースもあるのです。

つまり、家族の援助があるというのは、今の家族状況では当たり前ではなくなってしまったわけです。それをリスク化と言っています。全員結婚できないわけではないし、全員離婚するわけでもない。何かあつたときに、捨てられる可能性もあるけど、捨てられない可能性もある。そういうかたちで、家族に関する関係性というものが、リスクを伴うものになっている。これがたぶん、日本人にとってすごく苦手な分野なのです。

今までの日本社会は、ほとんどローリスク、ノーリスクでできたわけです。いったん就職して正社員になってしまえば、もう一生収入は保証され、引退しても年金でずっと安泰。いったん結婚すれば、一生それで安泰という精神状態でいたものが、今の時代は、職業的なものに関しても家族的なものに関しても、常にリスクを伴っている。結婚できるかどうか分からないし、結婚したからといってずっと続くかどうか分からない。正社員として就職できるかどうか分からないし、就職したらといって、それが一生続くかどうか分からないというようにリスク社会において、精神的安定をどうやって保つかという問題に、われわれは今直面しているのではないかと私は主張しているのです。ですから、ぜひとも皆さんにその点も、頑張りたいいただきたい。

日本の経済的な対策ですと、非正規社員の存在は経済的に不安定だ、では全員を正社員にしろ、ということになってしまうのです。結婚できなくて大変だ、では全員が結婚するように結婚キャンペーンでも起こそうかと、それを言われたときはばかじゃないかと思ったのですが、結婚させればいいと言います。離婚はけしからんということにしてしまえばいい。

10代の妊娠が増えていて、人工中絶なりデートレイプとかが増えているというような事を議題とした会議で、ある方が、こういう性教育をやっているという地方の実例を提出しましたが、何て書いてあつたと思いますか。高校を出るまでは性関係を持たないようにしましょう。年上の人とは付き合わないようにしましょう。2人だけでどこかに行くのはよしでしょう。という内容です。つまり、何かリスクがある、付き合ったり性関係を持つと妊娠したりするリスクがある。では、リスクがあるのだったらそれをすべてやめてしまえ、というのが、日本社会的な特徴です。

松下政経塾に留学しているフランス人の方がいて、その話をしたら、「えっ?」と驚き、フランスではもう中学校段階で、コンドーム

の使い方を、クラスの中で模型を使って、こうやってコンドームを付けるのですよ、そうしないと妊娠して危ないですよ、と教えるというのです。日本のように危ないことは全部見ないようにすればいい、消せばいいというような態度が、実は今回の原発事故につながったのではないかと、思っています。

少し話がずれましたので、結論だけ先に述べます。皆さまご存知だと思いますが、元上智大学教授の霜山徳爾先生がよくユングの言葉を引用なさっていて、私が一番好きなのは、「心理臨床の最終的な目的は、患者をあり得ない幸せな状態にすることではなく、つらい状態に耐える力を付けさせることだ」という言葉です。

何かつらいことがあつたら、それを消して幸せな状態にするというのが、果たしていいことなのでしょう。離婚が多くなってきた、結婚しない人が多くなってきた、非正規雇用が多くなってきた、というときに、では、その様な状態をなくせばいいのかといたら、もう今の時代でそれをなくすことは無理なのです。25%の人は結婚しないで一人で過ごさなければいけない。結婚しても3分の1は離婚を経験するわけですから。

また、非正規雇用・失業経験率というものをみると、高卒の人が、30歳までに正社員ではない状態を経験する確率は、もう6割ぐらいです。大卒でも、40%ぐらいの人が、30歳までに一度は失業状態か正社員ではない状態を経験します。そういうときに、失業はけしからん、非正規はけしからんという以上に、失業したとしても非正規社員になったとしても、離婚したとしても、結婚できずに一人でいたとしても、それに耐えられるような強い個人をつくるのが目的ではないでしょうか。それに耐えられる個人をつくることをサポートするのが政府の目的ではないかと、私は主張し続けていますが、なかなかそうはならない。不幸な状態があつたら、それがあるのはけしからんから、それを消して、なくしてしまえ、見ないようにしてしまえという反応が、まだまだ日本社会では多いような気がして、それが私にとっては気がかりです。

私は婚活、結婚活動というのを提唱した人間ですが、婚活したからといって全員が結婚できるわけではありません。40歳以下の独身者の人が3年後に結婚する確率は、だいたい10%ぐらいです。婚活をすれば、その3年が1年に縮まるぐらいのことで、もしくは年に3%ぐらいだったのが10%ぐらいに上がる程度であつて、婚活で全員結婚でき

るというわけではありません。しかし、世間では、私が意図したものとは違って、婚活をすれば全員がすぐに結婚できるようだというような誤解をされており、心外といえば心外です。

社会学者の上野千鶴子さんの『おひとりさまの老後』で、「おひとりさま」という言葉が流行りましたが、これは、私に言わせれば、今の現象の表裏です。好きで一人であるならそれは放っておけばいいわけですが、独身者の9割は、いずれは結婚したいと思っている独身者です。

一方、ここ2～30年のあいだに、大切なものは何ですかと聞いたときに家族と答える人が増えています。

また、これは中高年の方は思いがけないと思いますが、専業主婦になりたいという若い女性が、この10年のあいだに徐々に増えてきているのです。若い女性といったらみんなキャリアウーマンで、仕事をしたがっていると思うかもしれませんが、若い女性、未婚女性の4割は非正規雇用者です。ハンバーガーを売っているような未婚女性が、この仕事を続けたいから結婚したくない、時給600円だけどこれは大切な仕事だから結婚したくないなどとは思わないわけで、低賃金で不安定な仕事に就いている若い女性が、もう3～4割に達しているのですから、そういう人たちが、この状態を脱出するには、収入が高い男性と結婚するしかないというかたちで主婦志向が増えるというのは、分かる気もいたします。

さらに、2010年、無縁社会というのが流行りました。NHKテレビのドキュメンタリー番組で、無縁死が年間3万何千人と伝えています。年間100万人ぐらい亡くなりますから、人口の3%が身寄りもなく孤独死というか、無縁死するという状況になっています。この様な報道がされればされるほど、特に若い女性は、老後一人でいたくないという理由で結婚したいと思います。これも男女の差が大きかったです。

私が行なった内閣府の調査においても、結婚したい理由で、老後一人でいたくないという女性が44%でした。今、一人で寂しいというのは26%です。男性は、老後一人でいたくない、今一人で寂しいというのが両方とも26%で同じだったのです。女性の場合は、老後一人でいたくない方が、跳ね上がるわけです。特に日本の女性は、独身でもほとんど親と同居していますので、今は寂しくないけど、親が亡くなったら無縁死、というのが意識されていたらしい。だから

結婚したい、というエネルギーが強まっていると言えるわけです。だから結婚したい、という中では、やはり、経済的に、関係的に安定したい、子どもを持ちたいというような意識が、一番大きく強まっています。

これも、同じく内閣府の共生社会の報告書でダウンロードできますけれども、国際比較調査の中で、日本、韓国、スウェーデン、アメリカ、フランスの5カ国を調査したら、日本と韓国、アメリカとスウェーデンとフランスと、二極化する質問がいくつかありました。

一番面白かったのが、結婚生活において大切なものは何ですかという質問です。上位3つを選ばせるのですが、経済的な安定が大切だというのは、日本と韓国で圧倒的に高く、アメリカ、スウェーデン、フランスでは低い。3つ選ばせまうからそんなに高くはなりません、日本と韓国では50、60%なのに、欧米諸国では10%から20%ぐらいで、そんなに高くない。では、欧米では何が高かったかということ、お互いの性的魅力を高めること。夫婦生活においてお互いの性的魅力を高めることというのが、アメリカ、スウェーデン、フランスでは、だいたい20%から30%ぐらいの人が丸を付けるのですけれども、何と日本と韓国では10%未満。お互いの性的魅力を高めることが重要だと、日本と韓国ではほとんど誰も答えていなかった。同じ結婚というものであっても、アジアと欧米ではその意味がかなり違うということが分かりました。

だから、日本や韓国では結婚が少なくなり、少子化が起こるというのは私は常に主張しているわけで、まだまだ日本や韓国では、女性差別が大きいということもありますし、男性が主に生活を支えるという意識が、若い人のあいだでも高いわけです。意見を聞いたら、男は仕事、女は家事には反対。では、一番いいのは何かと聞いたら、男は仕事と家事、女は家事だけというのが、若い女性の中で一番支持が多かったのです。

年配の女性の先生は、これで怒り出してしまいました。私の時代は女性が仕事をしたかったから、女性は仕事と家事、男は仕事だけで頑張ってきたのに、今の若い女性は、男は仕事と家事、女は家事だけというのが理想とかいって、怒り出してしまったのです。もちろん、全員がそうだというわけではないです。非常に多様になっていますから、そういう人ばかりではないのですけども、そういう若い女性が多くなってきたというのも事実です。

となると、いくら結婚したくても、専業主婦

志向が高いからこそ結婚ができなくなります。結婚相手たる男性の収入がどんどん低下して、不安定化している人たちが多くなっているからです。

そうすると、もう一方で、家族のオルタナティブへの関心が高まってくるわけです。オルタナティブというのは、家族のようだけども家族ではない人、疑似家族みたいなものです。上野千鶴子さんの『おひとりさまの老後』がベストセラーになったのも、一人になったときに、どうやって関係性を付けていくかということのマニュアル本として、すごく関心が高まったからです。

コレクティブハウスとかシェアハウスのように、家族ではない人が共同生活をするというケースが、日本では少ないのですが、多少増えていますし、あと私が調査したのは家族ベツトというもので、ベツトを家族とみなすというかたちです。

学生に、家族か家族ではないかという領域が揺れているという話をすると、病気ににかかって100万円必要だったときに、自分の生活を犠牲にして100万円を出せるか、その100万円を出せる人を書き出せというかたちで言います。難しいですね。シェアハウスしている若い二人の一方が病気になって100万円必要になったというときに、一緒に住んでいる彼なり彼女が100万円を出すかという、なかなか出さないでしょう。

ゲイカップルを研究している私の弟子に、ゲイと一緒に住んでいる人だったら100万円を出すかと質問したら、やはりちょっと考えてうなりました。親がいる人は、親のほうにまず頼るなり頼れというふうに言うのではないかと答えました。

親子は家族という意識が強いので自分を犠牲にして100万円を出せます。親が病気になったときに100万円出せ、子どもが病気になったときはもちろん出すと思いますが、きょうだいは微妙でしょう。結婚して、離れて暮らしているきょうだいが病気になったときに、自分の生活を犠牲にしても100万を払うでしょうか。ですから、結婚した後のきょうだいというのは家族かどうか微妙なわけなんです。

けれども、ベツトには払えるわけです。ベツトを家族とみなす人の研究をしましたが、人間の病院よりも立派なベツト用の病院があります。私のところに猫が一匹いますけども、うちの猫が病気になって100万円出せば助かると思ったら、私は払います。

そういう関係になれるかどうかというのは

難しいところだと思います。家族以外のところに家族的なものを求めるときに、自分の生活を犠牲にしてまで100万円払ってもいい関係であるかどうかということも、問われてしまうわけです。

その点、バーチャルなほうは楽です。私のところの学生で、いわゆるメイドカフェにはまっている学生がいたので、どうなんだと聞いたたら、それはいいですよ。ドアを開けた瞬間、「ご主人さま、お帰りなさいませ、今日は何にいたしましょうか」と聞いてくれる。すごく大切に大事にしてくれる。バイトとは聞くと、バイトなんか俺はどうだっていいと思いますよ。つまり仕事で疎外されている反動でメイドカフェに行くというふうに解釈するのですけども、彼が、今度妹カフェにはまっているとか言うのですよ。ドアを開けると、ホットパンツとTシャツ着た若い女の子が、「お兄ちゃんお帰りなさい、疲れたでしょう、今日は〇〇がお茶を入れてあげるけど何がいい?」って聞いてくれると言うのです。帰るときにお小遣いといってたくさんのお金を置いていくのですけども、疑似家族みたいなものですね。おまえ、確か家に妹いたよと言ったら、妹は俺にお茶一つ入れてくれたことないですとか答えるわけですね。そっちのほうが、精神科に行くより気分はいいかもしれませんね。

これを聞いたときに、息子カフェという商売を始めようかなと思いましたよ。いつも息子から邪険にされているお母さんに対して、ドアを開けた途端にイケメンの美青年が、「お母さんお帰りなさい、いつも家事で大変だよ、今日は僕が入れてあげるよ」とか言って、お茶を入れてくれたら、1杯1,000円でも払うのではないかという気がします。でも、それは疑似的なものです。

私は、ひざ枕耳かき殺人事件（無期懲役判決）と呼んでいるのですが、ひざ枕で耳をかくだけで、何十万円使っちゃうわけです。それこそ100万円ではなく、1年に換算したら何百万円というお金を使って、お金がなくなって行けなくなったら、追いかけて回して殺してしまったという事件ですが、まさに疑似家族的なものの精神的安定というものも、考慮しなければいけないのかもしれないという時代になってきました。

例えば、内閣府の調査で、独身の男女に、メディアやドラマなどのスターやキャラクターに恋したことがあるかと質問をしたら、男性は1割、女性は2割の人がイエスと答えていましたから、そういうバーチャルな面での家族というものに、自分の家族的な欲求を求めているというような、未婚者が増えてき

たということです。

嵐の追っかけをしている、非正規雇用の50歳ぐらいの女性に話を聞きましたが、もう息子みたいなのです。もちろん独身で親と同居している、私の言う中高年パラサイトシングルなのですが、嵐の追っかけをして、それを話すときだけ目はうきうき輝いて、もう息子みたいと。息子がこれだけ売れて、つまり自分の息子が活躍しているような感情を投影しているわけです。べつに悪いことではないのですが、いわゆる家族が欲しくてもできない時代の感覚を、投影しているわけです。

最後に、少しまとめた話をします。家族を求める欲求の歴史と構造転換を短時間で話します。

近代社会というのは、実存的不安からは離れられない社会です。

前近代社会というのは、かっちりとしたコミュニティ、つまり生まれたときから育つまで一緒にいる仲間たちです。亡くなった先祖もこれから生まれる子孫も含めて、自分というものは知っている人同士のコミュニティの中に生まれてコミュニティの中で死んでいく。結婚も親が取り決めるから全員できるし、仕事も、男性だったら親の仕事、女性だったら結婚した先の仕事をずっと続ける。仕事の上昇もなければ不安もないという社会で生きていました。さらに、宗教があって、どんなときでも神様に見ていただいているということで、自分が必要とされないとか、自分がいてもいなくてもしょうがないという感情は起きようもないわけです。

近代社会は、自由な社会です。どんな職業にも就いていいし、誰と結婚してもいい、どこに住んでもいいという自由な社会は、逆にリスクフルな社会で、結婚できないリスク、仕事に就けないリスク、誰とも出会えないリスク、誰にも自分が承認されないリスクというものと、不可分です。哲学者はそのリスクを実存的不安と呼んだわけですが、近代社会は実存的不安と不可分なわけです。

しかし、近代社会は、家族と定職という2つのものを発明することによって、実存的不安を乗り越える道をつくりました。結婚相手を探すのは大変ですが、いったん結婚したらずっとそれは続く。つまり相手から選ばれて、日本人は口では言わないかもしれませんが、おまえが必要だ、おまえを大切にするというような関係をずっとつくってきた。男性においては定職です。職業に就くときは、いろいろリスクがあるけれども、いったん職業に就いてしまえば、会社に入ってしまうと、一生それは安定して続く。自分はこの社会

の中で居場所があるというかたちで、安定した家族と安定した仕事というものが、アイデンティティーの核としてあったわけです。

それがエリクソンのアイデンティティー論だったと私は思っています。つまりアイデンティティーの危機というものは青年期にくる。どんな仕事に就くか、自分に結婚相手がいるかというところは、自分でやらなければいけない。しかし、いったんそれに就いてしまったら、あとは一生そのアイデンティティーが続く。だから、そこからこぼれる人というのは例外で済んだわけです。定職に就けない人とか、結婚できないとか、離婚してしまう人というのは、エリクソンの言えば、職業と家族形成によってアイデンティティーをつくるというものの例外として処理されたのだと思います。

でも、今は、それが例外ではなくなってしまったから大変なわけです。永久に、アイデンティティーが不安定なまま置かれる人が、けっこう出てきてしまった。つまり、結婚したくてもできない、結婚しても離婚されるかもしれない。自分が家族にとって必要だ、大切にされているというような感覚を持ち続けられる人のほうが、少数派になってきてしまったのです。

大学の教授たる私とか、例えば医師の免許を持っている皆さんは、組織に属さなくても、医師であれば一生食べていけるとか、大学教師であれば研究をしているというようなかたちでアイデンティティーを得られますが、専門技術的なアイデンティティーを持っていない人たちというのは、今までは会社に正社員として所属することによって、家族をつくって家族が安定することによって、基本的なアイデンティティーを得ていました。しかし、この20年間に、たぶんこれはアメリカでもヨーロッパでも同じことが起きていますが、非正規雇用が増えて、仕事をしていてもこの仕事で明日なくなるかもしれないし、結婚していても、明日離婚されるかもしれない。つまり、生涯的にアイデンティティーが安定するというようなときが、だんだんなくなってくる。

そういう意味で、エリクソンのアイデンティティー論を何らかのかたちで書き換えていく必要があります。つまり、アイデンティティー・クライシスは青年期の問題ではなくて、常に一生涯アイデンティティー・クライシスにあるような状態に、われわれは社会的に置かれているのです。その様なときに、安定的なアイデンティティーというものをどこに求めるべきか、などという課題がでてくると思います。

ありがとうございました。